

○舍利殿 〔開山堂かいさんだうの後山にあり。額舍利殿と書す、隱元の筆〕

勅書額 〔堂内に掲る、後水尾帝ごみづのをのより舍利を隱元和尚いんげんに賜る勅書なり。其文に曰、

北天曾自テ奉シテ南山ニ。古仏真身ノ伝フ世間ニ。十万里程靈骨也暖也。三千年後異光ツラナル斑ヲ。宋皇述テ讚惑ヲ生相ニ。源將傾テ心欽ヲ定顔ヲ。

晨夕拳々トシテ服シ久シ。巖峯永仰クン五雲間。

〔仏舍利賜隱元禪師〕寛文己酉十月朔日。

舍利塔 〔滅金を以て作る、高さ三尺余〕舍利五粒〔塔内に安置す〕

脇土觀音 〔坐像八九寸許にして、塔の左右に二体を安ず〕

同壇（左）後水尾院宸影 〔画図絹地法服、御長二尺四五寸、払子を持し左に向ひ給ふ、土佐將監とさしやうげんの筆〕同壇（右）韋駄

天像 〔画図絹地、立像二尺七八寸許〕

○藏經印板庫 〔仏殿の巽山上二町許にあり、一切經に及び諸論釈の印版を蔵む。藏經彫刻の本願は鉄眼和尚てつげんなり、寺は摂州難波せつしうなにはにあり〕

普化墓ふけのはか 〔黄檗門前の南二町にあり。伝云、中頃虚無僧の祖普化良庵ふけりやうあんといふ者の墳なり。いにしへ此地は竹林にして、

都鄙の虚無僧等竹を争ひ截て尺八に作る、故に今荒廢す。原普化ふけ禪師は異国の人なり。此良庵といふ者其宗風を慕ふて、

専ら尺八を愛し、四方に遊ぶ、世の人これ呼んで和朝普化と称すとなん」

浮舟宮うきふねのみや 「普化ふけより四町許南、宇治路うじの右にあり。源氏卷宇治十帖の内なり。祭神詳ならず。傍らに榎の古木あり、

浮舟の杜といふ」

三室戸山みむろとやま 「三室戸寺みむろとの後山をいふ」

有範卿墓ありのり 「三室戸寺みむろとの内ありのりにあり、有範卿ありのりは親鸞聖人しんらんの父なり、本願寺伝記に見へたり」

万葉 玉くしげ三室戸山みむろとのさねかづらさねすはつるにありはてましを 大織冠

頓阿庵とんあのいほ 「三室戸みむろとに居住のよし草庵集に見へたり、今旧趾さだかならず」

世の中しづかならず侍し頃、三室戸の庵室にて

草庵集 さびしさは忍びこそせめいとひきて世を宇治山うぢの峯の松風 頓阿

宇治うぢ 「いにしへは菟道うぢと書す。応神天皇おうじんの皇子菟道稚郎皇子うぢわかいらつこのわうじ此地に幽居したまひ、終に薨じ給ふ。これを宇治陵うぢのと

号す。延喜式曰、菟道稚郎皇子山城国宇治郡うぢにあり、兆域東西十二町南北十二町、守戸三烟。云々。今の離宮八幡宮は

此皇子の靈を祀るなり。○宇治は京師より四里にして都の巽なり。名高き名蹟かすぐあり、前編に多く見へたればこゝに略しぬ。万葉集には千早振、宇治乃和多利乃、多幾乃屋乃、阿古爾乃原と咏り。これらの名跡は今絶てなし」古今著聞集曰　京極大殿の御時、宇治に白河院御幸あり。あまりに興つきざるによつて、今一日逗留あるべきのよしを申さる。然して明日還御あらば、花洛は大白の方にあたり、宇治は京より南にあたるゆへにこれを如何がせん、殿下遺恨をいだく。行家朝臣申て云く、宇治は花洛の南にはあたらす、喜撰が歌に我庵は都のたつみといへり、然らば何のはゞかり候哉と、殿下此由を奏聞す。仍て院の還御延引し給ふ、殿下甚感氣あり、人又美談とす。云々。

宇治十二景　春岸 ■ ■。　清湍螢火。　三室紅楓。　長橋曉雪。

朝日靄暉。　薄暮柴舟。　橋姫水社。　釣殿夜月。

扇芝孤松。　槇島曝布。　浮船古祠。　興聖晚鐘。